令和 4 年度滋賀県地域ケアサービス推進事業報告書

障害のある人の 社会参加について考える

~文化芸術をともに楽しむことから~

はじめに

昨今、障害のある方への福祉サービスは充実し、様々な障害についての社会的な認知も向上してきました。しかし、福祉制度のはざまに置かれている人や、その特性への理解が進んでいないことから福祉サービスが届きにくく、安心して充実した地域生活を送ることが難しい状況にある人も少なくありません。また、制度上は様々なサービスを利用できる一方で、充実した地域社会への参加が叶わない人もいます。

その人たちを取り巻くニーズとは何か、どのような支援が必要とされているのか。 そんな問題意識を出発点に、社会福祉法人グロー(GLOW)が行う、地域ケアサービス 推進事業(滋賀県補助事業)は障害特性による生きづらさやニーズに応じた支援のあ り方を探り、モデル的な実践を行ってきました。

今年度は、美術鑑賞や食をテーマとしたワークショップをきっかけに、「軽度知的障害」「盲ろう」「視覚障害」の方々のアクセシビリティ(社会参加のしやすさ)という視点で支援のあり方について研究しました。昨年度に引き続き、障害当事者、支援者、専門家らと協力して企画を考え、地域の資源を活用し、活動を行いました。今回は、これまで芸術鑑賞会などで取り組んできた工夫や合理的配慮を様々な場面に広めるとともに、社会参加の質を向上させる試みを行いました。障害のある人が地域において主体的に参加できる活動の幅が広がるように、アクセシビリティの向上を図る試みです。

また、同事業では、現代において糸賀一雄氏の思想に通底する実践を行っている方々の考えや活動を「SHIGA-FUKU」というウェブサイトで発信しています。障害福祉領域だけでなく、共生社会の実現につながる様々な取り組みについて、幅広く活躍されている実践者を取材しました。今年度は、福祉現場で働く人などのネットワークづくりの場として、過去に取材した方々を招いたトークイベントを開催しました。今回実施したアクセシビリティの研究に関連するインタビューに加え、本イベントのレポートを併せて掲載しています。

誰一人取り残さない共生社会づくりに向けて、制度のはざまにある人とともに文化芸術をはじめとする様々な活動を楽しむことで、それぞれの場や地域において相互理解が深まることを期待します。

2023年3月

社会福祉法人グロー(GLOW)〜生きることが光になる〜 法人事務局芸術文化部 芸術文化課

令和4年度滋賀県地域ケアサービス推進事業報告書 目次

はじめに

第1章 地域ケアサービス推進事業について
(1)事業目的 · · · · · · · · 4
(2)研究課題 · · · · · · · · 4
(3)実施内容 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
(4)本書における「アクセシビリティ」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第2章 信楽学園の皆さんと考える、やさしい美術館
(1)目的 · · · · · · 6
(2)開催概要 ・・・・・・・・・・ 7
(3)ワークショップの流れ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(4)参加者の声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
アンケート結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
(5)考察 · · · · · · · · 12
第3章 しが盲ろう者友の会の人たちと楽しむ、和菓子づくりワークショップ
(1)目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(2)開催概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(3)ワークショップの流れ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(4)参加者・講師の声····································
アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
(5)考察 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
(37.3%)
第4章 見る以外の方法で美術鑑賞を楽しむ
(1)目的 · · · · · · · · 22
(2)「無視覚鑑賞」とは22
(3)制作の流れ・・・・・・・・・・・・23
(4)鑑賞方法
①企画展「反復と平和――日々、わたしを繰り返す」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
②企画展「絵になる風景」・・・・・・・・・26
(5)来館レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
インタビュー 布施明美さん(小川酒店 店主) ・・・・・・・・・・・・30
インタビュー 岩倉絹枝さん(コドモフクひよこ屋 代表)34
「シガフク・カレッジ」レポート・・・・・・・38

第1章

地域ケアサービス推進事業に ついて

(1)事業目的

「誰一人取り残さない共生社会」の実現に向けて、アクセシビリティ(社会参加のしやすさ)の観点から、「制度のはざま」に置かれた障害のある人の支援のあり方について研究し、合理的配慮とアクセシビリティの更なる向上につなげていくことを目的とします。

(2)研究課題

障害のある人が安心して充実した地域生活を送れることを目的に、障害のある人のアクセシビリティの拡充を「参加する活動を選択できること」と捉え、文化芸術活動を切り口に研究を実施しました。

そこで研究課題として着目したのが2つ

の「制度のはざま」です。

1つ目の「制度のはざま」は、「支援の届きにくさ」です。盲ろう者や、周囲からわかりにくい生きづらさを抱えた人など、障害特性への理解が進んでいないことから、地域でその存在や生きづらさが可視化されないまま、十分なサポートを受けることなく、地域での様々な経験から遠ざかっている人たちがいます。コミュニケーションや移動に困難さがあったり、自ら情報を入手しにくい環境にあったりすると、幅広い活動を楽しむことは叶いません。本来の意味で、「選択できる」状況を作るためには、参加しやすい活動が地域に増え、興味や関心を持つきっかけとなる経験を本人が積み重ねられることが重要だと考えます。

もう1つの「制度のはざま」は、「社会参加 の質が保障されないこと」です。文化芸術を 鑑賞するための情報保障やサービスの提供 は、国の「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」に明記されており、制度上は様々なサービスを利用することができ、合理的配慮も普及しつつあります。しかし、制度の範囲内で保障された支援にアクセスできたとしても、それが「本当に充実した社会参加」につながるとは限りません。

例えば、視覚障害のある人が美術館で絵を 鑑賞するとき、作品の情報を点字による解説 や音声ガイドを通して入手できることはア クセシビリティの拡充に必要不可欠ですが、 果たしてそれは作品鑑賞を"楽しむ"ための 保障として十分だと言えるでしょうか。情 報保障に加えて、見えないことを前提とした 鑑賞方法があれば、知識を得られるだけでな く、作品を視覚以外の感覚で味わうことがで きます。そんな体験ができて初めて、「また美 術館で絵を鑑賞しよう」という意欲が湧き、 本人が自らの意思で選択できる環境につな がるはずです。

上記を踏まえ、制度のはざまにある障害の ある人も、参加する活動を選択できる社会を 作るという視点に立ち、実践を行い、その成 果を考察しました。

(3)実施内容

今年度は「軽度知的障害」「盲ろう」「視覚障害」の人のアクセシビリティに着目し、当事者、支援者、アーティストや専門家らと企画段階から話し合い、美術鑑賞や食に関する取り組みを実施しました。

障害児入所施設「信楽学園」の学園生と、 美術館が自分たちにとって楽しくて訪れや すいものになるにはどうすれば良いか考え るワークショップを企画し、みんなで出し 合ったアイデアを美術館で体験していただ きました。また、NPO法人しが盲ろう者友 の会の協力のもと実施した和菓子づくり ワークショップでは、地域の和菓子店から 講師を招き、プログラムを組み立てました。

さらに、美術館において、視覚以外で作品を鑑賞する方法を用意する試みも行いました。アーティストや専門家らと打ち合わせを重ねて触図などを制作し、視覚障害のある有識者に意見を伺い、ブラッシュアップに努めました。

(4)本書における「アクセ シビリティ」について

アクセシビリティとは、高齢者や障害者なども含めたあらゆる人の、情報やサービスへのアクセスのしやすさという意味で使われるのが一般的です。しかし、本書においては、「令和4年度障害者地域生活移行促進事業 地域ケアサービス推進事業」の要綱にならい、「障害のある人の社会参加のしやすさ」という意味で使っています。

第2章

信楽学園の皆さんと考える、 やさしい美術館

(1)目的

今年度は信楽学園の学園生と支援者の方々にご協力いただき、 2回に渡ってやさしい(※)美術館をテーマにワークショップを企画しました。信楽学園は、15歳から18歳までの主に軽度知的障害のある児童が利用対象となる障害児入所施設です。窯業の職業訓練と、生活指導、スポーツや芸術活動など多岐にわたる活動を通して、学園生が地域の中で自立した生活ができる力を獲得することを目指しています。

このワークショップでは、信楽学園の学園生が参加できる創造 的な体験と、自身の考えや希望が形になる体験の機会を創出し、学 園生にとって地域に居場所が増えることを目的としました。

※「やさしい」とは

- ・思いやりがある→「相手の立場に立って考え相手の気持ちを大事にして行動する」 (引用:東京都町田市社会福祉協議会)
- ・簡単、わかりやすい→情報が理解しやすい



第1回ワークショップの様子

(2)開催概要

第1回

日時:2022年7月13日(水)

会場:ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

対象:信楽学園の学園生

参加者:学園生5名、支援員2名

内容:①企画展「反復と平和――日々、わたしを繰り返す」の鑑賞と

やさしい美術館の検証

②「美術館こうだったら行きたい!」を考える

第2回

日時:2022年8月31日(水)

会場:ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

対象:信楽学園の学園生

参加者:学園生3名、支援員2名

内容:①企画展「絵になる風景」の鑑賞

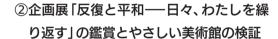
②それぞれの好きな方法で感想を共有する

(3)ワークショップの流れ

第1回

①自己紹介と企画説明

最初に信楽学園の学園生、支援員と事務 局職員で自己紹介の時間を設けました。この ワークショップの企画の内容や目的の説明 を行いました。



企画展を鑑賞し、その中で展示やキャプションなどのNO-MAの環境がそれぞれにとってやさしいものになっているか検証してもらいました。アンケートにもご協力いただき、どのように感じたかをお聞きしました。特にキャプションの"やさしいことばで読む"は「わかりやすくて良かった」「上の文章(作者紹介文)を読んだあと、下の"やさしいことばで読む"を読むとより理解できたように思う」と肯定的なコメントが多く出ました。

③ 「美術館こうだったら行きたい!」を考え るグループワーク

鑑賞の後は「美術館こうだったら行きたい!」をテーマに、美術館でしてみたいこと、こんな場所だったら訪れやすいということを2グループに分かれてアイデアを出し合いました。「NO-MAの中で作品を作ることができたら楽しいのではないか」「創作スペースを作って、今までここに来た人はこのような作品を作りましたということがわかるアルバムみたいなものがあるといいと思う」と





NO-MAで創作体験をしたいという希望が多く聞かれました。また、「その日のNO-MAスタッフが誰かわかるような仕組みがあると安心してNO-MAに来て鑑賞できると思う」との意見もありました。グループワークの最後には出た意見を皆さんで共有し、1日の振り返りを行いました。参加した学園生は今までに美術館に行ったことが全くない、今日が初めてという方もいれば、何度か美術館に行ったことがある方もいました。それぞれの経験をもとに「自分にとってやさしい美術館とは」について考えることができました。



第2回

④企画展「絵になる風景」を通したやさしい 美術館ツアー

2回目のワークショップでは1回目で出たアイデアをもとに、職員名札や鑑賞後の感想を表現する方法をいくつか用意した上で、企画展「絵になる風景」を鑑賞しました。2回目のワークショップということもあり、1回目よりリラックスして臨む参加者の姿が見られました。

⑤好きな方法で感想を表現する

鑑賞の後は、このワークショップを通して感じたことや思ったことを表現しました。表現する方法として、文章で書く、絵で描く、写真を撮る、パソコンで表現する、の4つの方法を提案しました。参加者3名がそれぞれ好きな方法を選び、感想を表現することができました。制作する場所は自由と伝えると、お気に入りの絵の前や落ち着く空間を見つけ集中して取り組んでいました。







①参加者が撮影したNO-MAの風景

(4)参加者の声

ワークショップの中で出た意見

- •NO-MAの中で何かを作ることができると 楽しいと思う。それを作って飾れるともっ といい
- ・創作スペースを作って、今まで来た人はこんなものを作りましたということがわかる 冊子やアルバムのようなものがあるといい。 多様性を尊重して、その場所では何を作ってもいいことにする
- ・当日のNO-MA職員がわかりやすいと安心 できる
- インパクトがある、目玉になるような作品 があるといいと思った
- 細かくてわかりにくい作品がもっとわかりやすいといいなと思った
- •ゆっくり、のんびりと鑑賞できるといい

参加した職員の声

児童が出した意見を反映していただけたのは良かったです。今年のメンバーは意見が出ましたが、来年度以降はまた違ったメンバーとなるため、今回と同じような企画をしていただいても意見が出にくい年もあると思います。その都度、担当者に児童の様子を聞いて下さると良いと思います。

第2回のワークショップでの制作物

- ·写真(①)
- 文章(ワード)(②)
- ・文章(手書き)(③)

NO-MAに来るのは3回目で、毎回違ったテーマで見応えがあり それぞれの作者さんは自分の感性と個性を生かして創作しているんだなと、 感じました。 日常では、芸術に触れることは少ないのでこういった展覧会で作品を鑑賞 出来るのは、とても嬉しいです。 障害者だから、という枠で仕切っていることも無く、多様性を尊重してくださる NO-MA さんには、自分自身の意見をとても言いやすいです。 私は、なかなか声に出して思いを相手にぶつけることができないので 作品とキャブションを通して、思いを感じられるのが凄いです。 これからも、多くの人に見てもらえるような展覧会にしてほしいです。

②参加者がパソコンを使って書いた感想

NO-MAに来きてみて、思ったことや感じたこと

ないかったです。 また木繋会かちんは電磁を友人と来てみたいなと思いまた

おりかとうごかいまけ

③参加者が書いた感想

アンケート結果 回答者:5人

質問1:またNO-MAに行きたいと思いますか? はい 5人

理由

とても見やすかったのでまた行ってみたいなと思った。

初めてこういった作品を取り扱っている美術館に行ったので見ていて楽しかったです。 わたしはNO-MAに行ってリラックスできる時、ゆっくり作品を見て楽しかったです。

とても楽しかったし、いろんな作品があっておもしろかった。

気になる作品が数多くあり、個性がみちあふれていて、また行きたいと思いました。

質問2:ワークショップに参加して良かった ことはありますか?(複数回答有)

【選択肢】	【回答者数】
わかりやすい説明の文章があっ	った5
作品をみた	3
感じたことを表現した	3
NO-MA・美術館に行った…	2
いろんな人と出会った	
話し合いをした	2
自分の意見が伝わった	2
NO-MAのSNSで紹介された	2
顔なじみの美術館ができた…	2
その他	0

質問3:NO-MA以外の美術館へ 行ったことはありますか?

【選択肢】	【回答者数】
2回以上行ったことがある	32
行ったことがない	2
無同答	

(5)考察

このワークショップでは、「やさしい美術館」について検討すると同時に、信楽学園の学園生にNO-MAをより身近に感じてもらうこと、そして自分のアイデアが実現される機会を作ることに重きをおいていました。

第1回は慣れない環境や知らない人との出会いもあり参加者は緊張の面持ちでしたが、第2回のワークショップでは緊張がほぐれ、鑑賞中も会話が弾みました。これはワークショップの回数を分け、どちらも同じスタッフで実施したことによる効果であると捉えます。

また、ただ企画展を鑑賞するだけでなく、「やさしい美術館」について検証し自分の考えたアイデアを体験することで今まで少し遠い距離に感じていた美術館をより身近に感じるきっかけとなったのではないかと考えます。

検証する中で、NO-MAの展示作品のキャプションについている"やさしいことばで読む"は、アンケート内の「ワークショップに参加して良かったこと」を尋ねる質問でも参加者5名全員が「わかりやすい説明の文章があった」を選んでいました。感想を話す中でも肯定的な意見が多く、"やさしいことばで読む"が実際に鑑賞の手助けになっていることがわかりました。

さらに、「好きな方法で感想を表現する」の中で出た意見として、「NO-MAでは、自分自身の意見をとても言いやすい」や、「また機会があれば家族や友人と来てみたい」といった感想がありました。意見を出しやすい場所であること、また行きたいと思える場所であ

ることは「やさしい美術館」において大切な 要素ではないかと考えます。そう思っていた だける場所が地域に増えることを目指して いきたいと思います。

今回は信楽学園の学園生を対象に開催しましたが、今後も様々な立場の人にとって「やさしい美術館」とは何かを検証し、実践していきます。









第3章

しが盲ろう者友の会の人たちと楽しむ、 和菓子づくりワークショップ

(1)目的

盲ろうは、目(視覚)と耳(聴覚)の両方に障害のあることを言います(※)。盲ろう者は、情報を得たり、人と会話したり、外出することが困難です。このため、社会から孤立してしまうこともあります。

その一方で、食は多くの盲ろう者にとって親しみのあるものです。食べること、料理することは、味覚や触覚でも楽しめます。この実践では、盲ろう者が社会とつながり、いろいろな活動に参加しやすくなるように、食を通したワークショップを企画しました。そこには、2つの目的があります。

1つは、盲ろう者が主体的に参加できる活動が地域に増えることです。地域にある様々な楽しみに出会い、参加できる機会が増えることで、選択肢の幅が広がり、充実した社会参加につながると考えます。

もう1つは、盲ろう者の活動の幅を広げる 地域住民が増えることです。地域の人が盲ろ う者に出会い、必要なサポートやちょっとし た工夫、また、いつも通りの振る舞いで良い ことなどに意識が向けられ、相互理解が深ま ることを目指しました。

※見え方や聞こえ方の程度は、全盲ろう(全く見えなくて、全く聞こえない)から弱視難聴(少し見えて、少し聞こえる)まで様々です。コミュニケーション手段には、触手話、指点字、点字、手のひら書き、音声、筆記などがあります。 障害の程度や視覚障害と聴覚障害のどちらが先に生じたかにより、その人が使用するコミュニケーション手段は異なります。



和菓子づくりワークショップの様子

(2)開催概要

日時:11月15日(火)

①10:40~11:40

212:10~13:10

313:30~14:30

会場:安土コミュニティセンター調理実習室

参加費:500円(食材費)

講師:御菓子司 万吾樓 髙嶋正人氏

参加人数: 盲ろう者6人(通訳介助者6人)

協力:NPO法人しが盲ろう者友の会

簡単な和菓子づくりを体験できるワークショップを実施しました。和菓子の歴史や特徴について講師にお話しいただいた後、事前に用意された食材と型を使って和菓子を作りました。作った和菓子はお持ち帰りいただき、ワークショップの最後に、感想を共有する時間を設けました。

(3)ワークショップの流れ

しが盲ろう者友の会の協力のもと、和菓子づくりを体験できるワークショップを企画しました。講師には、地域の和菓子店「万吾樓」を営む髙嶋正人さんをお招きしました。参加者は、しが盲ろう者友の会の生活訓練「たっち」を利用されている盲ろう者の方から募りました。

事前打ち合わせ

講師、しが盲ろう者友の会の支援者と事前 打ち合わせを行い、ワークショップの内容や 必要なサポートについて話し合いました。

講師の提案により、作る和菓子は、形をさわって確認でき、生地を型に入れて押し出す「練り切り」にしました。実際に型や見本のお菓子をお持ちいただき、作り方の手順や通訳介助者の役割を確認しながら、盲ろう者も楽しめる和菓子づくりの内容を考え、通訳や作業にかかる時間を考慮してプログラムを組み立てました。また、使用する型の数に限りがあったため、ワークショップは3回に分けて、各回少人数で実施することとしました。

ワークショップの内容を考える中で支援 者からは、「お菓子の歴史についても紹介し てほしい。 盲ろう者がそのような話を聞く機 会は少なく、興味を持つ方もいるのではない か」という意見が出ました。

ワークショップ

①状況説明•自己紹介

ワークショップを始める前に、盲ろう者の 方に周囲の情報を伝えるための状況説明と 全員の自己紹介をしました。









②和菓子の紹介

講師の髙嶋さんに、和菓子の歴史について お話しいただいた後、ワークショップで作る 「練り切り」の説明をしていただきました。

③見本づくり

和菓子の作り方を髙嶋さんが実演しなが ら説明しました。

少し見える方は、近くでその様子を見なが ら手順を確認し、見えない方は、道具などを さわり、通訳を介して説明を受けていまし た。

④和菓子づくり

最初に、使用する型をさわっていただきました。全6種類ある型は、それぞれ季節の文様の形をしています。今回は、各参加者2種類の型を使って和菓子を作りました。

型の形を確認したら、あらかじめ用意された生地をこねて、あんを詰めていきます。生地を型に入れ、形を整えて押し出したら完成です。できあがった和菓子は、容器に入れてお持ち帰りいただきました。

高嶋さんや助手の方が手助けをしながら、 盲ろう者、通訳介助者の皆さんは楽しそうに 取り組んでいる様子でした。

⑤質問と感想

参加者からは、和菓子づくりの方法や髙嶋さんの和菓子店「万吾樓」について質問が寄せられ、髙嶋さんが丁寧に答えられていました。また、参加者の皆さんに感想を発表していただき、「楽しかった」「上手にできた」という声が多く上がりました。

アンケート・聞き取り調査

後日、参加者へのアンケートを実施し、講師への聞き取りを行いました。









(4)参加者・講師の声

参加者

- ・家族に食べてもらった。美味しいと言ってくれた。
- ・今回は箱型を使用しましたが、ヘラを使って作っていたのをテレビで見たことがあり、試しでやってみたかったです。
- 店にある他のお菓子を作ってみたい。
- ・来年度にもう1回作ってみたいです。

通訳介助者

- ・めったに経験できない機会を得られるのは盲ろう者さん共々嬉しく思います。和菓子づくりの前に講師から道具やら説明をいただきましたが、私の場合は書いて伝えなければならないので時間に追われる感じでした。
- ・少し見えておられるのと、料理の経験もあり、楽しんでされていたと思います。 通 訳することで困ったことはありませんでした。
- ・本人さんは、勘がとても良くスムーズに作れました。
- ・実際にさわってもらいながら作れたので良かったです。作り方を伝えるとき、通訳者が事前に作り方の手順がわかっていたら、もっとスムーズに伝えられたかなと思いました。

講師

初めて盲ろう者の方を対象にすると聞いたときに、どういう状況の人が来られるのか全くわからなかったので少し心配していました。当日は、思っていた以上にスムーズに型に入れて押されていて、介助されている方も上手くお支えされていたので、非常に助かりました。皆さん、楽しく参加されている様子で良かったです。

「もう少し進んだこともしてみたい」という方もおられたので、次は何ができるか相談しながら考えていかないといけないなと思いました。ただ、参加される人によっては、今回したことがちょうど良かったり、初めてされるのか、経験があるのかによってもやりたい内容は違ってきたりするので、それは今後の課題です。前もってどういう人が参加されるのかわかれば、それぞれの希望に沿う内容を考えられるかもしれません。また、介助の方が通訳されているときに、どこまで言って、どこで止まって待てば良いのかは判断が難しく、迷う場面もありました。

今回、企画に参画し、盲ろう者の方もいわゆる一般の方と同じような体験を少しでも したいという気持ちがある方が多いのだとわかり、良かったなと思います。



講師の髙嶋さんが見本を作っている様子

アンケート結果 回答者:5人

質問1:ワークショップに参加した理由を教えてください。(複数回答有)

【選択肢】	【回答者数】
和菓子・甘いものが好き	3
和菓子を作ってみたい	3
興味があった	1
参加しやすい	
参加するように勧められた	
その他「友の会のたっちの行事」「盲ろう者事務所	fのビラ 2

質問2:ワークショップで良かったことはありますか?(複数回答有)

【選択肢】 和菓子づくりができた	【回答者数】
美味しかった	
新しい体験ができた	······ 1
さわって楽しめた	····· <u>]</u>
自信を持てた 講師の先生と出会えた	······]
近くに和菓子屋があることを知った	
その他	······ Č

質問3:また和菓子づくりをしてみたいですか?

はい 5人

質問4:近くにある、講師の先生の和菓子店に行ってみたいと思いますか?

はい 3人 いいえ 1人 無回答 1人

(5)考察

今回のワークショップでは、盲ろう者から 「へらを使った和菓子づくりを試してみた かった」「もう1回作ってみたい」など、今後 の活動への希望や意見が出たことが、大きな 成果でした。この点は、しが盲ろう者友の会 の活動場所がある地域で和菓子店を営む髙 嶋正人さんに講師として、企画段階から参画 いただいたことが背景にあります。必要なサ ポートを支援者の方たちと確認しながら、盲 ろう者も楽しめる和菓子づくりの内容をと もに考えることができました。ワークショッ プ当日、盲ろう者の皆さんは、手際よく作業 に取り組み、楽しんで和菓子づくりをされて いました。通訳介助者の方と一緒に生地をこ ねたり、講師の髙嶋さんからアドバイスをも らったりする姿も見られ、できた和菓子を型 から取り出す瞬間の喜びをみんなで共有し ました。

"楽しい"という気持ちが、和菓子づくりへのさらなる興味につながっていきます。様々な体験を積み重ねることで、盲ろう者も自ら選んで好きな活動に参加しやすい環境が実現するといえるでしょう。

また、ワークショップを通じて豊かな相互 理解が生まれたことも成果です。

講師の髙嶋さんは、企画に参画し、最初は どういう状況の人が来るのかわからず不安 だったけれども、実際に盲ろう者の方と出会 い、ワークショップを進めていく中で、その 不安はほぐれていった、と話しておられまし た。今後どのような活動ができるかについて は、支援者とともに検討し、それぞれの方の 状況に合わせて考えていく必要があるので はないかという意見をいただき、次につなが る可能性も示されました。このように、食を 含む文化芸術の分野において理解のある方 が地域に増えることで、盲ろう者も楽しめる 活動の幅が広がると考えます。

今後は、参加者として地域住民の方も一緒 に活動できる場を作ることで、地域において 相互理解がさらに広まることを願います。









第4章

見る以外の方法で美術鑑賞を 楽しむ

(1)目的

見えない、見えにくい人が美術鑑賞を楽しむうえで、必要なサービスを受けて情報を取得できることは必要不可欠です。近年、美術館などの文化施設では、点字や音声ガイドで情報を提供したり、視覚障害のある人を対象とした鑑賞プログラムを実施したりするなど、視覚障害のある人にも楽しんでもらえるよう、鑑賞しやすい環境を整備する取り組みも広がりつつあります。

しかし、作品の説明があることは、「鑑賞体験」を提供するための十分な合理的配慮になるのでしょうか。個々の作品の「作品性」を丁寧に味わい、自分なりの鑑賞体験を得るためには、作品についての機械的な情報提供以上の取り組みが必要なのではないでしょうか。

この実践はそんな問いを出発点に、「見る以外の鑑賞方法を、作品それぞれに合ったやり方で用意することで、見えない、見えにくい人も充実した美術鑑賞を楽しむことができる環境につながるのではないか」という仮説を検証するために実施しました。

(2)「無視覚鑑賞」とは

「無視覚鑑賞」とは、近江八幡市にある美術館、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAを拠点に、視覚的な作品を視覚以外で鑑賞していただくための取り組みです。各企画展の全出展者の作品について、丈夫な立体作品はできる限り直接さわっていただき、絵などの平面作品は立体コピー技術を用いて線や面を浮き上がらせた触図を制作するなどして、作品を視覚以外の要素に置き換えた展示物を用意しました。



「無視覚鑑賞」の案内と点字キャプション

(3)制作の流れ

鑑賞方法を用意するにあたり、点字・触図 工房BJに協力いただき触図制作者と打ち合 わせを行い、それぞれの作品の性質に合った 触図もしくは鑑賞方法について相談しまし た。触図化する作品や部分をピックアップ し、アーティスト本人に確認できる場合は触 図のイメージや立体化するうえで重視する ことなどを話し合いながら進めました。

また、作品を表現した音声や立体の展示物においては、アーティストや空間デザイナーに協力いただき、アーティストから作品を視覚以外の要素に置き換えたときの印象を聞き取りながら、確認や微調整を繰り返し、具現化する方法を検討しました。

(4)鑑賞方法

1.企画展「反復と平和――日々、わたしを繰り返す」

4月29日(金)~7月31日(日)

陶土でできた吉川秀昭さんの立体作品は 直接さわれるようにし、また、小林椋さんの ディスプレイやレバーなどのパーツが組み 合わさった彫刻は、作品に使われたものと同 じ素材で作成されたパーツをさわれるよう に用意しました。(①②)

清水ちはるさんの映像作品は、音声がない シーンはスタッフが説明し、会場でも展示し ていた、ちはるさんが制作する「箱」は、実物 もさわれるようにしました。(③)

絵の作品については、それぞれの性質に 合った触図を制作しました。

篠原尚央さんの「かぎかっこ」を意味する《カキカコ》と言われる作品は、複数の触図を制作順に並べて冊子にしました。そうすることにより、本来、かぎかっこにはない曲線や塗りつぶしが追加されていくという作品の変化をたどることができます。「四角」「丸」「文字」の大きく3つに分けられる佐々木早苗さんの作品は、形の凡例を付けて触図化し、作品の全体像がわかりやすくなるようにしました。(④⑤)

壁一面に300点ほど展示したのは、鈴木かよ子さんのはがきサイズの自画像です。どのように絵とその膨大な量を視覚以外の情報に置き換えるかが課題でした。そこで、触図



①吉川秀昭《目・目・鼻・□》2019-21



②小林椋さんの作品に使われたものと類似したパーツ



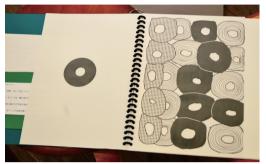
③清水ちはるさんが制作する 「箱」



④篠原尚央さんの作品の触図

を数枚作り、同時に、展示してあるのと同じ 枚数のはがきサイズの紙を箱に入れて用意 しました。箱の重さと紙の枚数で量を想像し ていただくという方法です。(⑥)

また、アーティストに協力いただき、音声を組み合わせた展示物を制作するということもしました。横山奈美さんの作品《forever》は、1日に1枚というペースで、前日に自分で描いた女の子の絵を見ながら、新しい1枚を描いていくというものです。並ぶ絵は一見同じように見えますが、よく見るとわずかに変化していることがわかります。しかし、その変化は触察だけではわかりにくいため、アーティストの横山さん、触図制作者と話し合い、他に鑑賞できる方法はないか模索しました。そして、横山さんに1日ごとに「forever」とつぶやく声を録音してもらい、音声を聴きながら触図をさわるという方法を試みました。(⑦)



⑤佐々木早苗さんの作品の触図



⑥鈴木かよ子さんの作品の触図



⑦横山奈美さんの作品の触図と音声

2. 企画展 「絵になる風景」

8月11日(木•祝)~11月6日(日)

モン族のルーツを持つドゥ・セーソンさんの刺繍は、直接さわっていただきました。展示された作品は、民族の歴史や文化が綴られた「ストーリー・クロス」と呼ばれるもので、刺繍をさわりながら解説を聞くことで、そのストーリーを追うことができます。(®)

5人の作者については、作品の性質に応じた絵の触図を用意しました。

「光るもの」が描かれた畑中亜未さんの絵は、モチーフとそれを説明する言葉が合わせて描かれているのが特徴です。触図では、モチーフを立体化し、言葉を点訳しました。(⑨)

三橋精樹さんの作品は、一見すると真っ黒に見えますが、そこには風景が綿密に描かれています。通常、触図を作るときは線を浮き上がらせますが、反対にへこますことで、一見真っ黒に見えるという絵の特徴を表現しました。また、作品の裏に書かれている絵の内容の文章は、点訳して触図の裏に貼り付けました。(⑩)

古久保憲満さんが5年かけて制作した 10mの絵巻物には、まちの絵が細かく描かれています。描き方の変化を感じられるよう、異なる時期に描かれた3か所の部分をピックアップし、さわってわかりやすいよう



⑧ドゥ・セーソン《メコン川を渡って~戦争からの逃避~》2010-17



⑨畑中亜未さんの作品の触図



⑩三橋精樹さんの作品の触図



⑪古久保憲満さんの作品の触図

に縮尺を大きくして触図化しました。(①)

衣真一郎さんは、形や色の塊で風景を表現します。 衣さん本人と打ち合わせをして幅2m以上の大きな作品1点の触図を制作しました。 両手で鑑賞しやすいように実物の約20分の1の大きさに仕上げ、様々な質感を組み合わせて絵の風景的な要素を楽しめるようにしました。 (②)

古谷秀男さんのブラジルと日本で過ごした体験に空想を交えたような風景の絵は、人物や動物、象徴的なモチーフが描かれた作品数点を触図にしました。ドットや細かいストロークを立体的に表現しました。(③④)

福田絵理さんの絵は、おぼろげな室内空間を描いたもので、形や輪郭がくっきり見えないため触図化することが難しい作品でした。そこで、アーティストの福田さんと空間デザイナーに協力いただき、作品の印象を空間で表現した展示物を作りました。福田さんに、絵の触感のイメージを伺い、空間デザイナーに素材や制作方法について相談しながら具現化していきます。できあがった鑑賞方法は、木の箱の中に手を入れると、綿で表現された空間や立体物をさわることができるというものでした。(⑤)



⑫衣真一郎《横たわる風景》2021-22



③古谷秀男《トンボ》2009



⑭古谷秀男さんの作品の触!



⑮福田絵理さんの作品を空間で表現した展示物

(5)来館レポート

見る以外の方法で美術鑑賞を楽しめるように取り組んだ2つの企画展の会期中に、国立民族学博物館准教授の広瀬浩二郎さんと木彫作家の小原二三夫さん、それぞれに美術館にお越しいただきました。全盲のお二人に鑑賞方法を体験していただき、意見を伺いました。

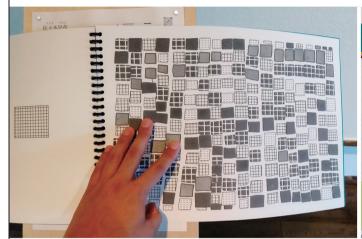
初めての試みとして「無視覚鑑賞」を実施した企画展「反復と平和――日々、わたしを繰り返す」では、「すべての作者の作品を見る以外の方法で鑑賞できて良かった」という感想をお二人からいただきました。小原さんは、音声がないシーンをスタッフが説明しながらご覧いただいた、清水ちはるさんの映像作品について、「最も印象的だった。ちはるさんとご家族の生き方に感銘を受けた」と振り返っておられました。

広瀬さんからは、箱の重さと紙の枚数で作品の量を感じていただいた鈴木かよ子さんの絵について、「作品点数のボリュームを感じることができた」とのフィードバックをいただき、触図で絵を比較できたことも良かったということでした。一方で、「いい挑戦だが、似たような触図が続くものについては、触知する労力に対して微細な変化がわかりにくく感じた」という意見もいただき、課題も見えてきました。

上記の意見を踏まえて取り組みを進めた 企画展「絵になる風景」では、小原さんは、モン族の刺繍に関心を持たれ、ドゥ・セーソン さんの作品を直接さわることができて良かっ たということでした。また、触図については、 「古谷秀男さんの作品が風景らしくて良かっ た」と話しておられました。三橋精樹さんの 線をへこませた触図については、お二人とも わかりにくかったという感想で、文字は触図 の裏ではなく隣にあると良いのではないか という意見をいただきました。また、広瀬さ んからは、「大部分の作品を見る以外の方法 で鑑賞できるのはうれしいが、触図の枚数が 多かった。福田絵理さんの作品のように、触 図以外のものもあると良い」というフィード バックをいただき、鑑賞方法の制作には更な る改善の余地があることがわかりました。

美術館で展示される多くの作品は、見て楽しむことを前提とするものです。この「無視覚鑑賞」の取り組みは、見ることを前提とした方法で楽しむことはできないか考え、それを実践するという試みでした。展示の一部や、さわることを前提とした展覧会だけでなく、常に美術館において作品を見る以外の方法で楽しむことができれば、見えない、見えにくい人も本来の意味で足を運びやすい状況につながるでしょう。

今回、広瀬さんと小原さんに来館いただき感じたのは、「無視覚鑑賞」は定型化できるものではなく、それぞれの作品に合った鑑賞方法を作者と相談しながら制作することが重要である、ということです。また、見える人からも、「触図やアーティストのイメージに沿って作った展示物があることで、より作品を楽しめた」という声がありました。情報保障に加えて、言葉や説明では表しきれない作品性というものを感じられることで、誰もが当たり前に充実した美術鑑賞を楽しめる社会が実現することを願います。









インタビュー

布施明美さん

浜大津にある酒屋、小川酒店店主の布施明美(ふせ・あけみ)さん。障害者施設で働いていた経験を持つ布施さんは、現在、障害のある作者さんの作品を日本酒のラベルに使用するなど、福祉に関わる実践を続けておられます。福祉に興味を持ったきっかけや、お店を経営しながら地域の中で取り組んでこられた企画について伺ってきました。

(2022年6月15日 小川酒店にて)



学生の頃からの思い

>まず初めに、布施さんと小川酒店とはど ういうつながりなのでしょうか?

私は、ここ小川酒店の娘なんですよ。もともとお店を継ぐ気はなかったんですけど、2人目を出産して、当時、大阪に住んでいて、子どもを保育園に預けられず、親にも手伝いに



小川酒店の外観

来てもらえない状況だったので、実家に帰っ てきました。

>大阪では何の仕事をされていたのです か?

つきのき学園という高槻の知的障害者通 所更生施設に10年間勤めていました。私、学 生の頃から福祉に興味があって、糸賀先生や 田村先生、発達障害の研究をしていた田中先 生の本を読んだりしていました。びわこ学園 にちょっとボランティアに行っていたこと もあります。

>昔から福祉には興味があったのですね。

障害を持っている人たちと空気が合うというか。保育士になりたかったので、保育園 や福祉の現場で働きたいと思っていました。

実は、高槻の市役所の採用試験に受かったとき、保母として応募していたのですが、保育園は空きがなかったんです。障害のある人の施設だったら空きがあると言われて、学生

の頃からの思いがあったので、つきのき学園 に入りました。

一流のホテルで コンサートを

>障害のある人が参加できるコンサートの 実施に関わっておられたとお聞きしまし た。

つきのき学園の近くに障害者の診療をし ている歯科医の女性がおられました。その 方が、音楽を聴いていると障害のある人たち が穏やかな気持ちになれるというのと、自閉 症のお子さん、ご兄弟、親御さんはなかなか コンサートには行けないからということで、 20回近く大阪の一流のホテルで障害のある 人が参加できるコンサートをされたんです。 プロの歌手を呼んで、ちゃんとしたお料理を 食べて。一流のホテルをバリアフリーにする という、すごく大きな働きをされていて、私 もこの活動に協力させていただいていまし た。コンサートには、つきのき学園のお子さ んや親御さんなど、肢体不自由の人、知的障 害のある人、いろんな人が来られていて、耳 が聞こえない人も振動で音楽を楽しんでお られたことは懐かしいです。

>本格的なコンサートを企画されていたのですね。

でも、参加費が高かったんです。やっぱり 高いレベルを目指しておられて、豊かな障害 のある人たちが楽しめるための会だったので 12,000円くらいしました。つきのき学園の お子さんや親御さんも年を取り、コンサート を継続することが大変になり、先生は終止符 を打たれました。そこで、酒屋に戻ってきてから、私と友達で「ちっちゃいことからしようか」と言って、6回くらい「むすびし水のコンサート」というコンサートをしたんです。 私たちはそこまでハードルを上げずに500円くらいで参加できるようにして。こっちはこっちですごく意味があったように思います。

まだ大阪でその歯科医の女性がコンサートをされていたとき、お土産用にすてきなマグカップやプログラムをつくっておられました。そのご縁で出会った方がデザインしてくださり、小川酒店の包装紙が生まれました。今、その先生はもう歯科医を辞められて、コンサートも終わりましたが、21歳になるこの包装紙がその流れを物語っているんですよ。



小川酒店の包装紙

お酒と器

31

>小川酒店ではお酒だけでなく、焼き物も 販売されているのですか?

もともとお酒にはそんなに興味がありませんでした。つきのき学園にいたときに焼き

物の作業があったんですよ。それで焼き物が すごく好きになって、施設を辞めて帰ってき てから日本酒に目覚めたというか。焼き物と 同じものを感じたんです。土があって、水が あって、火があって、つくっている人の思い があって、その土地があって。日本酒も一緒 だなと思いました。

前は作業所の人たちがつくった草木染め や和紙のものとか、いろんな雑貨もお店に置 いていたんですけど、今はお酒と器に絞って います。



お店に並ぶ器

作品をお酒のラベルに

>朝市でもお酒を出しているそうですね。

毎月、「浜大津こだわり朝市」に出店しています。朝市では作業所でつくられたパンやクッキーの委託販売も行われていて、委託者のおおつ福祉会の作業所さんには造形活動をされているところもあります。そこで描かれた作品を、年に1回くらい、朝市に出すお酒のラベルに使わせてもらっています。そして去年は、展覧会「アール・ブリュットー日本人と自然ー BEYOND」(※1)の出展者である浅野春香さんの作品をラベルに使用しました。



浅野春香さんの作品がラベルとして 貼られた日本酒の瓶

>以前から、作品をラベルに使うことはされていたのですね。

「マーカーや絵具代にしてください」ということで作業所に代金をお支払いするということを細く長く続けてきたのですが、作者の方に直接は届かないのですよね。今回、浅野さんには、ラベルを貼ったお酒の現物を送らせていただきました。

作品をラベルに使うと、その方にも喜んでいただけるし、ご兄弟なども「そのラベルのお酒が欲しいから」と言って買いに来てくださいます。いつかそれが、朝市のときだけではなくて、ワインのラベルなんかにもなったらいいなと思っています。

>障害のある作者さんの作品をラベルにしたいと思ったきっかけは何ですか?

双子の妹が、今のみずのき美術館(※2)の 館長の奥山理子さんと懇意にしていて、みず のきはアール・ブリュット(※3)の世界では 歴史のある美術館で、私も行ったことがあり ます。私自身絵も好きなので、作品に興味は すごくあったんです。何か福祉のことで酒屋 としてできることはないかなと思って、お酒 のラベルという形で関わっていけたらなと 思いました。

※1 「日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル」の一環として2022年2~3月に滋賀県で開催された展覧会。

※2 母体である障害者支援施設みずのきの創立5年目に 開設された絵画教室(1964~2001)から生まれた作品を 所蔵、展示する美術館として、2012年に開館。

※3 直訳すると「生(き)の芸術」となるフランス語。画家 ジャン・デュビュッフェが1945年に考案した言葉で、自身 の内側から湧き上がる衝動のままに表現した芸術を指す。



朝市の様子

作業所に通う人たちと、お酒 を楽しむ

>酒屋として目指していることはありますか?

今、海外で日本酒はすごく盛んなんですけ ど、私たちは日本の人たちに滋賀の地酒を もっと知ってほしいと思うので、朝市のため にいろいろとお酒を選びに行って、売らせて いただいているんです。その土地に行って、 その土地が生んだ土壌、景色、歴史、風土を 体で感じて、飲ませてもらって、蔵の人たち と苦労話も含めたいろんな話をして、それを 販売させてほしいし、やっぱりおいしいお酒 を置きたい。

>お店に来た人は、滋賀県内のおいしいお 酒に出会えるということですね。

障害のある人で就職している人もいろんなストレスがあると思います。そういう人たちがお酒を飲みながら、日頃の愚痴を言ったりできるような会をされている方が瀬田の方におられて、「今日はその会のために」と言ってお酒を買いに来てくれます。私たちも一度だけ、作業所に通う人たちが、飲み過ぎたりしてトラブルにならない程度に、喫茶店でお酒を楽しむ会というのをしたことがあります。お酒が好きな人にちょっとずつ飲んでもらうということをしました。何かあったときのことを思うと、ものすごく難しいけど、またしたいですね。お酒は楽しいものなので。

布施明美(ふせ・あけみ)

株式会社小川酒店

小川酒店の長女として、浜大津に生まれ育ちました。もともと陶芸が好きで、お店に置きだしたのですが地酒との共通点に気づき、日本酒にはまります。近江の地酒とそれに合う肴を、器と共に楽しく勉強する日々です。

インタビュー

「毎日が、ちょっとだけ、変わる コドモフク」。そんなキャッチフレーズで、点滴や車いす、医療的ケアなど、様々なニーズを持つお子さんのための衣類を販売するオンラインショップ「ひよこ屋」を運営する岩倉絹枝(いわくら・きぬえ)さん。ショップの開設から10年が経ち、最近では、感覚過敏のお子さん向けの靴下の販売も始めたそうです。そんな岩倉さんに、起業当時の想いや苦労など、様々なエピソードを伺いました。(2022年6月28日 オンライン)



24時間の病院付き添いで置かれた状況

>オンラインショップを立ち上げようと思 われたきっかけを最初に伺ってもいいです か?

自分の息子が、生後6か月の時、感染症で 急に入院をして、私も付き添ったのがきっか けです。

その後も入院が続いて、息子は1年半で6回の入退院を繰り返しました。そのたびに24時間の付き添いです。病室で朝を迎え、私の夫や実母と交代しながら、病室から会社へ行く生活でした。

>お子さんが入院して、家族が24時間付き添うときって、お母さんはどんなふうに病室で過ごすものなんですか?

子どもには、もちろんベッドが1台確保されますよね。でも母親は患者ではないので、

寝る場所がないんです。うちの場合、まだ乳幼児だったので、子どものベッドで添い寝をしていたんですけど、「絶対に目を離さないでください」と言われ、「じゃあ、トイレとか、ご飯とかどうするのかな」みたいな感じで(笑)。

子どもなんて、元気に普通に育っていくものだと思っていたんですけど、ある日突然、「病気です」となった瞬間に、想像もしない世界にポンと放り込まれたような気持ちでした。



「ひよこ屋」トップページ。可愛らしいデザインのページに、様々な商品が並ぶ。

「点滴したまま着替えってできないんだな」

>当時振り返って洋服関係で何か困り事とか、大変さがあったのはどんな部分だったんですか?

これも本当に想像していなかったんです けど、子どもが24時間点滴治療になったの で、そうすると「点滴したまま着替えってで きないんだな」というのに初めて気が付いて (笑)。

>点滴からの着替え、考えてみると、確か にそでが通らないですね。

そうなんです。でも吐いたりとか、点滴の 影響でおしっこが増えたりとか、普段以上に 服が汚れるんです。ただでさえ体調悪くて入 院しているから、気持ちよくしてあげたいん だけど、いちいち看護師さんを呼ばないと着 替えすらできなくて。

その他にもいろいろ不便はあって、「病院に付き添い者用のご飯を届けてくれる業者さんがあったらいいのにな」「親が快適に夜寝られるような簡易ベッドがあったらいいのにな」とか、思いついた「あったらいいのに」をツイッターで呟いていたんです。そしたら、知り合いではなかった、あるデザイナーの方から「洋服のことなら力になれる」と返事があったんです。すごい偶然ですよね。

>ネットショップを立ち上げようと決め、 実際に立ち上げるまでには、どんな苦労が ありましたか?

経験もなければ、人脈もお金もない状況 で、「ネットショップで、子ども服を」とだけ 決まっていました。それで、「まずは最低限、 ネットショップの環境と、そこで売る商品を 作らないといけないんだな」というところか ら始めて。

副業でもできるかと思っていたんですけ ど、時間的な制約もあって、ショップの制作 は業者さんにお願いをしました。すごくい い方に出会えたんですが、「じゃあ、お店の名 前、何にされますか」と言われて初めて、「そ ういえば、決まってないわ」と気が付くよう な状況でした(笑)。

デザイナーさんもすごくいい方で、一生懸命やってくれて、一応オリジナルの商品が1つできました。



最初に企画したという、点滴しながら着替えられるパジャマ (ひよこ屋ホームページより)

「自分の働き方として果たしてこれでいいのかな?」

>少し話が戻りますが、そもそも、前職を やめて起業することは勇気が要ったと思う のですが、当時はどんな心持ちだったので しょう?

息子の入院に付き添っているときは、土木 関連の設計事務所でフルタイムの仕事をしていました。だから毎回、急に「息子さん、今 日から入院です」と言われると、「でも明日、 私、案件締め切りなんだけど……」みたいな

ことが頭をよぎったりとか。

でも「このまま、もし今回の入院で子どもが亡くなったら、たぶんお葬式で仕事の締め切りのこと考えてるんじゃないかな?」と思って、働き方を変える必要があると気づきました。

同じタイミングで、自分と同じように困っている親御さんがいるとわかったので、それを仕事にしつつ仕事のリズムも変えようと思って。自分にとっては自然な選択だったかもしれません。



Instagramには、岩倉さんが実際に商品を使いながら、 その使用感を紹介する動画も。

感覚過敏のお子さんは「靴下 のソムリエ!

>今、力を特に入れている商品など、あったりしますか。

これまで、肢体不自由さん向けの商品を多く扱ってきたんですけど、最近は発達障害の方向けの商品も取り扱い始めまして、特にニーズが大きかったのが靴下でした。

>靴下、ですか。

定先に縫い目があるのってわかりますか? 普通は意識しないような縫い目ですけど、感 覚過敏のお子さんの中には、あの縫い目が気になって履けない子がいるんですよ。靴下がはけないので、学校にも行けなくなるとか、毎朝30分かけて靴下を履くとか、お母さんと毎日履く、履かないでバトルになるとか。

そこを何とかできる商品はないのかなと探したら、イスラエルにあったんですよ。じゃあうちでも、と思って販売をしたら想像以上に好評で。私が見てもわからないんですけど、感覚過敏のお子さんが履かれると「全然違う、これなら履ける、これしか履けない」という声をいただいて。

他にも、「これ履いて登校できるようになりました」「毎日喧嘩してたストレスから解放されました」「毎日泣きながら履いてた靴下がうそみたい」と嬉しい反応が続出でした。



感覚過敏のお子さん向けに仕入れた「シームレスソックス」。 カラーやサイズも選べる。

>すごい反響ですね。そんな風に困っている子がいるとは想像もつきませんでした。

感覚過敏のお子さんたちって靴下のソム リエさんみたいな感じなので、同じメーカー さんから色違いの靴下を購入してもらった 方に、「この前白を買ったときは大丈夫だっ たけど、ピンクは駄目だった」と言われたこ ともあります。

なぜだろうと思ってメーカーに問い合わ

せたら、実は色によって作っている工場が 違ったとわかって。その違いを、足先で感じ ていたんですね。本当に、すごいと思う。

>こういうことって、今まさに困っている 人にとっては、とっても必要な情報ですよ ね。

はい、そういうことを身近に関わっている 親御さんや支援員さんがちょっと知ってい るだけで、靴下の選び方とかも変わると思っ ていて。リハビリとか療育とか、専門的な部 分はノウハウが溜まっていたりするけれど、 生活に振り切った情報ってあまりないんで す。それをカバーしていくのも、うちの役目 かなと思っています。

徐々に知ってもらってきて 今がある

>立ち上げて10年たって、たくさん商品のラインナップも、知ってくださっている方も増えたと思います。これから目指していることなどありますか?

検索キーワードもないところから始まった事業ですが、10年たって少しずつ状況が良くなってきた感じがします。ネット環境も整ってきて、購入される親御さんが情報にアクセスすることも簡単になってきた。もっと存在が広まって「そういう子ども服があるんだ」ということがだんだん認知されれば、「そうか、調べればあるんだ」と思ってくださいますよね。

そこに行くまでの時間と認知度は、右肩上がりに正比例しない気がして。 やっぱりこういう商品は口コミが大事で、使ってもらった

人が「こんなにいいものがあるんだ」と思ってくれれば、人に言いたくなるはず。そういう連鎖で、もっと多くの人に届けていけたらと思っています。



SNSでは、実際に商品を使っている お子さんがモデルとして登場する。

岩倉絹枝(いわくら・きぬえ)

コドモフクひよこ屋 代表

息子の入院をきっかけに、病気や障害のある子どものための介護用子供服のネットショップを立ち上げる。国内外からデザイン性と機能性に優れた商品を集めて販売するセレクトショップとしてキッズデザイン賞2020受賞。現在は子供服を通した発達障害へのサポートにも力を入れている。

「シガフク・カレッジ」レポート

●開催趣旨とコンセプト

▶趣旨

福祉現場で働く方、また福祉に関心を持つ方が、滋賀県内で、様々なフィールドで福祉実践を立ち上げている方の存在やその取り組みを知り、「福祉実践者」としての自覚とモチベーションを再発見するとともに、同志とのネットワークの起点となる出会いを創出する。





▶コンセプト

一方的な講義形式ではなく、双方向のコミュニケーション コーヒー片手に広場に集まるような、リラックスした雰囲気

●全6回の開催概要

参加方法:オンライン 参加費:無料

第1回 10月26日(水)19:30~21:00 「子育て世代が、集える場所を。」 宮本麻里(合同会社LOCO代表)

第2回 11月9日(水) 19:30~21:00 「ブラジル人の、子どもに居場所を。」 中田ケンコ(コレジオ・サンタナ(サンタナ学園)校長)

第3回 11月16日(水)19:30~21:00 「ともに働き、食を楽農しむ」 杉田健一(NPO法人 緑活 常辞理事)

第4回 11月30日(水)19:30~21:00 「働く女性たちのジレンマ ~障害福祉の現場から~」 坂本彩(彩社会福祉十事務所代表) 第5回 12月7日(水) 19:30~21:00 「おまえが滋賀に、ダルクをつくれ。」 猪瀬健夫(NPO法人 びわこダルク 施設長)

第6回 12月14日(水)19:30~21:00 「僕らにとっての、糸賀一雄。」 増野隼人(社会福祉法人びわこ学園 重症児者 相談支援センター びわりん 相談支援専門員)

●各回の流れ

19:30-19:40 イントロダクション
19:40-20:00 講師によるトーク
20:00-20:30 講師へのインタビュー
(聞き手:SHIGA-FUKU運営メンバー)
20:30-20:50 参加者からのコメント・質問・意見交換
20:50-21:00 クロージング

当日のチャットの中でいただいた感想を一部、紹介します。

- ・私も働く母ちゃんですが、振り返ると誰かとつながる場所が欲しくて、働いているお母さんや、子育てしているお母さんとつながりたくて、孤独な時間を長く過ごしました。フルタイムで働いていると、なかなか誰とも出会えない辛さ…平日のツケを休日に取り戻す毎日…誰かとつながりたくても毎日を送ることで精いっぱい…この時間に、仕事のつながり以外の働くお母さんの話を聴くことができて、明日からまたちょっと頑張れそうです~!(第1回)
- ・職員さんも利用者さんも「やりたいことをする!」みたいでとても良いなと思いました。どうしても職員になると「枠」にはまって「しなければならない」になりがちですが。毎日の暮らしに「やる気」をもらえました。(第3回)
- •面白いキーワードがたくさんあって、大変参考になりました。「実践の還流」ですが、 還流の一部である保育者の存在をもっともっと学術的に(黒川さんのご研究も含めて)浮かび上がらせることを継続していただくことが、障害者福祉の分野(その他の 社会福祉の分野もですが)、働く女性たちのジレンマを考え、対峙することにつながっていくのではないかなと思いました。(第4回)
- ・きっと私の中にもふとした弱さがあって、少しの違いでその先の人生が大きく変わる のだろうなと感じました。自分勝手、自己評価の低さ、また依存症の人は「頑張ること =無理をすること」になってしまう、という言葉に自分も当てはまることが多くて共 感しました。(第5回)
- ・シガフク・カレッジにずっと参加したいと思っていたのですが、ようやく参加できたのが最終回でした。今回のお話から明日からのヒントをたくさんいただきました! 頑張ります!(第6回)

●特別対談レポート

12/14(水) 19:30~21:00 シガフク・カレッジ第6回 特別対談「僕らにとっての、糸賀一雄。」

今回、最終回に行った対談の一部をレポートにて紹介します。糸賀一雄の言葉や実践が、現役で福祉の仕事をしている人たちにも、強いインパクトを与えていることが伺える対談です。

増野隼人(社会福祉法人びわこ学園 重症児者相談支援センター びわりん 相談支援専門員) 聞き手:大平眞太郎(社会福祉法人グロー 芸術文化部長)

はじめに

大平 この「シガフク・カレッジ」は糸賀一雄 思想の普及の一環として、福祉の実践者の皆 さんをお呼びしてきましたが、最終回は糸賀 一雄さんについて語る会にしたいと思います。 ゲストは増野隼人さんです。

増野 よろしくお願いします。

大平 増野さんは、私がびわこ学園に就職したときの、1つ上の先輩にあたります。 増野さん、早速ですが、糸賀さんを知ったきっかけなど教えていただけますか?

糸賀一雄との出会い

増野 今でこそ、糸賀一雄さんのことを人前で話す機会もありますが、就職した当時は正直よく知らなかったんです。本は読んだけど、意味があんまりわからなかった。それが15年経って、映画「夜明け前の子どもたち」(1968年)を再び見て、衝撃を受けたんですね。

大平びわこ学園を舞台にした、療育活動を

記録した映画ですよね。 ずいぶん古い映画です。

増野 そうなんです、初めは「長いし、古いし、暗いなぁ」としか思わなかった。だけど 15年ぶりに見たら、療育に対する職員の想いと、目の前の現実に苦しむ職員たちの姿が、今の自分に重なるなと。「結果ではなく、そのプロセスにこそ価値が宿る」みたいなセリフにも感銘を受けました。

大平 ちなみに私も学生時代に糸賀一雄の『福祉の思想』を読んで、これが30年も前に書かれたことに驚いて。それで、糸賀さんがやろうとしたことには続きがあるんじゃないかと思って、びわこ学園に就職したんですよね。

増野 「前」だけでなく、遠い昔の人が残した 言葉や実践のような「後ろ」にこそ、学ぶも のがありますよね。

目の前の人のために

大平 若いころの活動をご紹介いただけませんか?



増野が勝手に選ぶ 糸賀一雄関連おススメの書籍

シガフク・カレッジ 第6回の様子

増野 はい。当時、大きな課題だったのが、 長期休みでの障害のある子の過ごし方で。当 時は「ロングヘルプ」という仕組みを利用し て、9時~17時まで、支援者が付きっ切りで 過ごすんですね。でも大人と子どもでマン ツーマンで1日を過ごすのは変だと思って。 だから2年目に「まんぼう」というサークル を作って、同世代とも交流できる場を作った んですよね。

大平 「こんなの作ったからお前も来い!」 と言われたのを覚えています。

増野 昼間は子どもたちと遊んで、夜は飲みに行くっていうのが定番でしたね。「自覚者は責任者」なんて意識はなくて、目の前の人の困りごとをなんとかできないか、って想いでがむしゃらにやってたような気がします。

少しずつ前に進んでいた

大平 当時の私たちの職場(大津市立やまび こ総合支援センター)は、若い人が多かった ですよね。

増野 そうそう。上の人たちも、若い人が

ふっかける議論や提案を認めてくれる土壌 があった。今考えるとありがたいですね。

大平 先輩から、昔のびわこ学園では夜遅くに職員同士が寮に集まって1人ひとりの子どもの成長について語り合っていたと聞いて、 私もそれにどこか憧れていました。

増野 あの頃ホントに何も資源がなく、出来ないことばかりで、ぐるぐる同じところを回っていた感覚でした。全国、どこも同じだったと思います。でも今考えると、螺旋階段のように、横から見れば少しずつ前に進んでいたのかもしれないですね。

まとめ

「"映画鑑賞"ってのは、予告編を見てどの映画を観ようかな~って選ぶところから、 見終わって感想を友達と喋るまでの一連のプロセスのことを言うと思うんだよねぇ~」

先日、一緒に訪れた映画館を後にしたある友人が、ふと口にしたことです。 なるほど、確かにそうかもしれません。

チラシや予告編に期待を膨らませ、映画館に向かう道中。館内が暗くなり映画が始まる瞬間の静けさ。そして2時間後、映画の終わりとともに会場の電気が付き、長い旅から帰ったかのように自分が映画館にいたことに気づくあの感覚。そして友人とともに感想をあれこれ喋る帰り道。その一連のプロセスを味わうために、私たちは休日の大事な時間を使ってでも、映画館に足を運ぶのでしょう。

私たちが文化や芸術を心から楽しんでいるとき、私たちが体験しているものの正体を言葉にすることは、思いのほか難しいことです。だからこそ、「誰もが文化芸術を楽しめる」ことを目指すとき、例えば映画であれば、「映画館の段差をなくし、映画に情報保障を備え付ける」といったストレートな取り組みだけでは、肝心の部分に手が届かないのかもしれません。

ましてや、障害のある人や社会の様々なサービスにアクセスしづらい人にも、その体験が保障される方法を編み出すにあたっては、クリエイティブな発想が欠かせないでしょう。包摂的な社会の「次のステージ」に行くために社会全体で取り組むべきことは、その辺りにあるのだと思います。

そう考えていくと、今回の事業で取り組んできたのは、難題だったのかもしれません。ただ、信楽学園生と美術館のあり方について語り合い、盲ろう者と和菓子を作るというワークショップを企画し、見えない人にとっての美術鑑賞の可能性を探る過程で、面白いものがいくつも見えてきました。

本報告書はこれらの取り組みの過程で見えたいくつもの気づきをまとめたものです。この報告書が多くの方の手に届き、さらなる気づきやアイデアの種が生まれることを願っています。